

巨椋池干拓地におけるカラーリングをつけたケリの観察
○脇坂英弥・脇坂啓子・中川宗孝（巨椋野外鳥類研究会）

1. 寿命と繁殖能力

1996年3月28日に、京都府の巨椋池干拓地で捕獲したケリ（成鳥・性不明）の左脚にカラーリングをつけて放鳥した。

その後、2009年5月3日、同所の水田において抱卵中の本個体を発見した。それから6日後の5月9日に同じ水田でヒナ1羽を連れてくる本個体を観察した。

つづいて、翌年2010年4月25日、同所において本個体と標識されていない成鳥個体との交尾を観察し、本個体はメスであることが分かった。それから約40日後の6月5日にヒナ3羽を連れてくる本個体を観察した。

以上のことから、ケリは少なくとも14年以上の寿命と繁殖能力を有することが示唆された。



2. ペアの継続と営巣場所への帰還性

カラーリングにより個体識別したケリ成鳥31羽を対象とし、産卵から育雛に至る繁殖行動を2007～2011年の5繁殖期にわたって調査した（調査地の繁殖個体群は、非繁殖期に姿を消す夏鳥的な動きをする）。

その結果、同一ペアによる複数年の営巣を確認できた2ペアの記録から、少なくとも5年間はペア関係が継続することが分かった。また、わずか2ペアの記録ながら、ペア関係が継続している間は、繁殖の成否にかかわらず翌年以降も続けて同じ場所に帰還し、営巣することが示された。

本種の成鳥には毎年定期的に同じ営巣場所で営巣する帰還性の強い個体がいる一方で、必ずしも営巣場所に毎年戻らずに、空白年を経て帰還する個体も存在した。この空白年に標識個体がどこにいるのかは不明である。

3. ふ化後のヒナの移動

個体識別したケリの親鳥とそのヒナを追跡して、ふ化後のヒナの移動を調査した。その結果、すべての親子が巣のあった田面から隣接田面へ移動することが確認された。ヒナが移動する際、田面と田面の境界にある畦と農道は移動の妨げになっていないことが分かった。しかし、コンクリート製の水路（両側壁が床面に対して垂直な形状）は、ヒナが水路底に落下した場合にそこから脱出するのは難しく、移動の阻害要因になっている可能性があった。

早成性のヒナは親鳥から給餌を受けずに自ら採餌する。そのため、ヒナが成長に必要な餌量を確保するには、同一田面に留まるよりも隣接田面へ移動する方が有利なのかもしれない。